1959年１月31日第３種郵便物認可

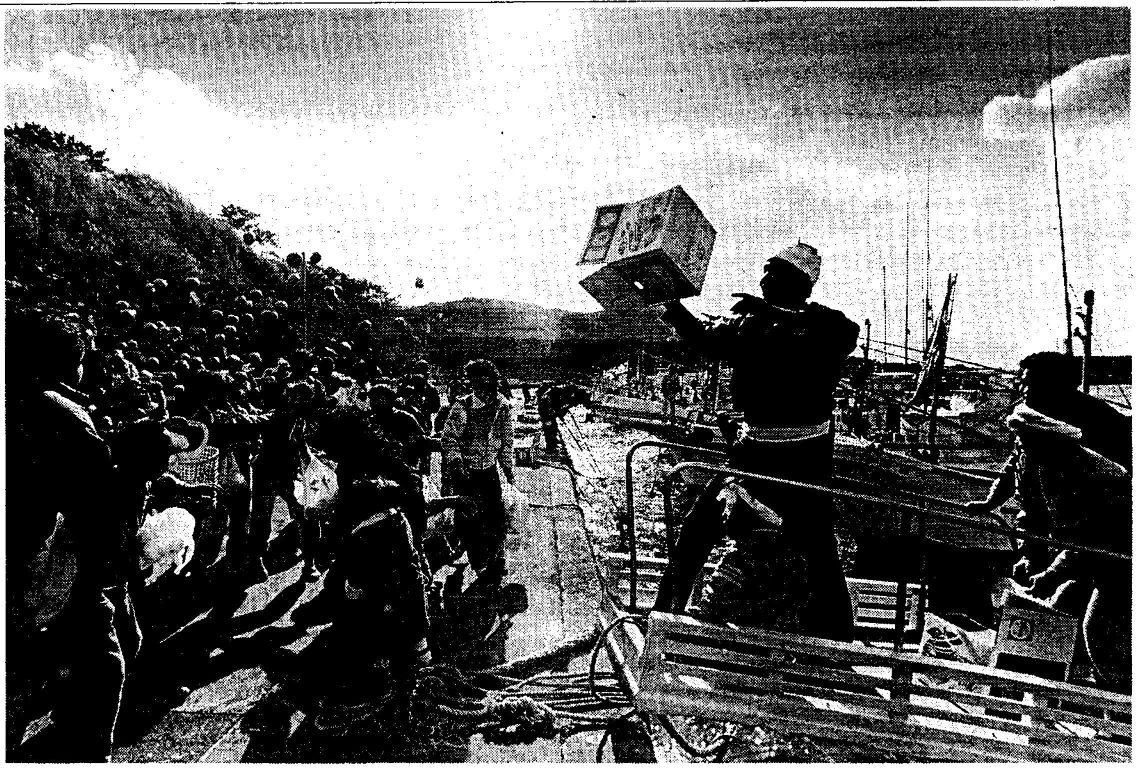
週刊 うたごえ新聞

1/4・11
(1988年)
NO.1188

THE SINGING VOICE OF JAPAN
日本のうたごえ全国協議会機関紙
うたごえ新聞社
〒160 東京都新宿区大久保２—16—36
☎ 03 (209) 0638　FAX 03 (200) 0105
振替口座 東京2-5631　毎週月曜日発行
１部120円(〒25円)・月480円(〒120円)

新春特集号

三宅島より 新春のたより



▲ 三宅島の新年は正月２日の「船祝い」で始まる＝撮影・森住卓

▲防衛庁の鉄柱強行建設に反対して、すわり込みで抗議する島民（1987年９月１日）＝撮影・森住卓

「チッチッ」と鳴く声の方に目をやると、あまいみつを求めて、メジロが椿の木で群れているではありませんか。緑一色の島に椿の花が咲きはじめたのです。偏西風が吹き荒れるこの時期に。赤い花は人の心をなごませ明るくしてくれます。

ハンノキやサンゴジュの木で防風林をつくった段々畑が、山の中にあちこちとあります。キヌサヤ豆をつくっている農家は大忙しです。摘んだ豆を夜なべでA、B、C、はずれなどと、ひとつひとつ選別するのですから。澄んだ空気と人の汗で、おいしい作物ができるのです。海を越えて、正月の食卓を飾るのでしょう。

「宝は地面から湧きでるものだよ」と、さらりと言ってのける農夫。自然の恵みが人の命を支えていることを、自然のままに受けとめて暮らしている島の人たち。食事どき、自分の口に運ぶ前に山の神様、海の神様に感謝することを忘れずにいる人がたくさんいます。生きた信仰を持つ暮らしぶりに心ひかれて、島に住みついた私です。

「おい、どこ行くだ」と、道で行きから人に声かけられます。私も「元気？」と声をかけます。人の気持の率直さに触れると、さわやかな気分になります。きょうもファイトでいこう、自ずとしてくるものです。

一九八八年、三宅島はいつもと変わらず日の出を拝み、日の入りに感謝して、新しい年を迎えるでしょう。

黒潮にかこまれ、この悠々たる大自然のなかにあって、どうしてこうも人の心を苦しませるのか——NLP問題と付きあって五年目を迎えます。

一日一日を真剣に生きてきました。その誇りを胸に——今年はさらに手綱を引きしめて。二月は村議選があります。十一月は村長選があります。毎日を真剣に生きて、島の歴史をひとりひとりがつくっていくのだと思います。

全国のみなさんの支援が、三宅島の運動の力の一端になっています。この美しい島へ一度はいらしてくださいね。

十一月のある日のことでした。

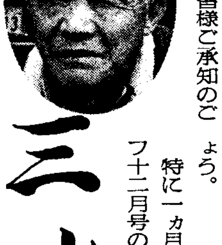
「歌に感激して、体の水分がみんな出ちまうようでただ涙でなあ、口では言い表わせんぞ」

十一月のうたごえ祭典に、三宅島阿古から五人参加しました。早朝の船で帰島した寺本久枝さんはさっそく背負いかごを背中に畑に出ていました。自転車で走る私を呼び止めて、その感動を話してくれたのです。あの時の久枝おばさんの表情は生き生きとして、とても幸せそうでした。今もそうですけど。

人生を生き抜く詩を、生き抜く智恵を人から人へ贈り物できるような、そんな暮らしを愛しています。

佐々木美代子・記

新年おめでとうございます



三浦次男

（官民共用空港建設に反対する会会長）

新年おめでとうございます。

平素より私たちの三宅島NLP建設反対闘争に際しては大きなご支援をいただき、この場をかりまして全国の皆様に厚くお礼を申し上げます。

私たちのたたかいも丸四年すぎ、五年目に突入し、心あらたにして今後の展望をふまえ、全会員一致で六十三年の新しい年を迎えます。

六十二年は皆様ご承知のごとく大変な年で、特に九月一日の鉄柱建設に対する政府防衛庁は、機動隊、施設局、ガードマン、合わせて五百名前後の者が来島突入し、素手の老若男女を、しかも平均年齢五十五歳くらいの力で押すだけしか出来ない島民に暴力団の様におそいかかりました。私たちは九月一日のことは終生忘れることは無いでしょう。

特に一ヵ月後にラジオライフ十二月号の付録を見てわかりましたが、それによれば沖縄の国体を想定してやるという驚くべき記事です。隊員一人ひとりの氏名はもちろん、たたかいの器材から、ガス銃五丁、弾（たま）百発等々、本当に驚きました。これが機動隊の暴露記事として出ました。警察とは一体なんなのでしょうか。皆様も良く判断して答を出してください。

しかしそれでも私たちは、誰もがいやがる物は私たちもいやなのです。だから自分たちの生活と四千島民に豊かな恵みを与えている三宅島を守るために軍用空港をお断わりする、あたり前の事なのです。

どうか皆さん、相手は巨大な政府防衛庁と強い米国を主張する人です。全国の世論の力が絶対必要なのです。自分の目で見、耳で良く聞き、連帯を深める意味からもぜひ来島のほどをお待ち申しております。

最後に日本のうたごえのみなさまの御健闘、並びにうたごえ新聞社のご発展を、遠い三宅島より祈念いたしまして新春のごあいさつにかえさせていただきます。

◆部落差別と闘う母親たち「世界でいちばん大きな花は」合唱団 2面、今年◇
◇は創立40周年（中央合唱団、名古屋青年合唱団、関西合唱団）3面、いわさきちひろ◆
◆絵本美術館の10年（松本猛）4面、フレッド・スモールが◇
◇やって来る（矢沢寛）5面、新春インタビュー 城戸真亜子さん 6・7面、浜◆
◆島幹事長、鶴東京のうたごえの会長に聞く 8・9面、裏木曽・加子母◇
◇村から 11面、新春のこの人—佐藤しのぶさんに聞く 12面◆

ふめんだい

先日、上京した際、久しぶりの雪に出あった。安ものの靴のため、中までしみこみズクズクのまま歩いていた。

☆　★　☆

思い出したのは、八年間、毎年十二月になると新潟へ大須事件被告としてオルグにはいった一ヵ月間のこと。

馴れぬうちは足もとの冷たさは格別であった。自分の足で歩き真実を訴えたことの誇りと重なり、東京の雪の冷たさも心地よいものに感じた。

☆　★　☆

「湯の町エレジー」などを聴くと、少年時代の切ない貧しさ、淋しさばかり思い出す。

歌のよしあしは別として、誰もがその時々の歌を聴き、うたい、さまざまの悲しかったこと、嬉しかったことを思い出すにちがいない。

☆　★　☆

「うたごえ」の歌もまた、久しぶりに聴く人にとって、きっといろんな思い出があるだろう。

これから何年か後、何十年か後、同じようにこの時代の歌がうたわれ、思い出となり語られる。

☆　★　☆

ねがわくば「うたごえ」の歌がもっともっとうたわれ、切なさ、悲しさ、懐かしさだけでなく、胸あつくなり、時として勇気を蘇らせるような歌でありたい。雪の冷たさ、足もとの冷たさも懐かしく、あたたかくなる歌でありたい。

（学）